

単身高齢者の自立した地域居住を可能にする地域資源の実態とあり方について

－ 釜ヶ崎における単身高齢者の地域居住および地域資源ネットワークに関する研究(2)－

正会員 ○林一樹\*  
同 岩川晋也\*\*  
同 横山俊祐\*\*\*  
同 徳尾野徹\*\*\*\*

釜ヶ崎 あいりん 単身高齢者  
地域居住 地域資源 ネットワーク

1. 研究の背景と目的

大阪釜ヶ崎は戦後日雇労働を求める単身男性が多く住まう「労働者の街」として発展してきたが、労働者の高齢化とともに「生活保護受給者の街」へと変容しつつある。しかし、図1に示すように多様な生活関連資源や人的資源が豊富に存在し、転用型アパートといった狭い居住資源ながらも、複数の居場所を獲得しながら幅広い地域資源ネットワークを形成した生活を送ることができる。本研究では、単身高齢者の豊かな独居生活を可能にする地域資源の実態を把握することで、自立した地域居住を展開できるような地域資源ネットワークおよび生活支援のあり方の模索することを目的とする。

2. 地域施設の実態

2-1. 釜ヶ崎の地域資源

多様な資源が密集しながら混在していることが図1より分かる。居住資源は地域全体に幅広く分布しているが、中でも萩ノ茶屋小学校から西成警察署の間で簡易宿泊所が密集しており、サポータティブハウス(SH)が近接しているなどエリアによって差異が生じている。また、簡易宿泊所や転用型アパートでは各階共同のトイレや台所、一階には共同風呂・談話室などが設置されているが、それらだけでは生活は成り立たず、生活関連資源を活用するこ

とで居住資源のもつ狭小性を補完していると考えられる。

2-2. 施設の利用状況

表1は代表的な地域施設の利用状況や運営体制を示している。施設利用の特性として以下の2つが上げられる。

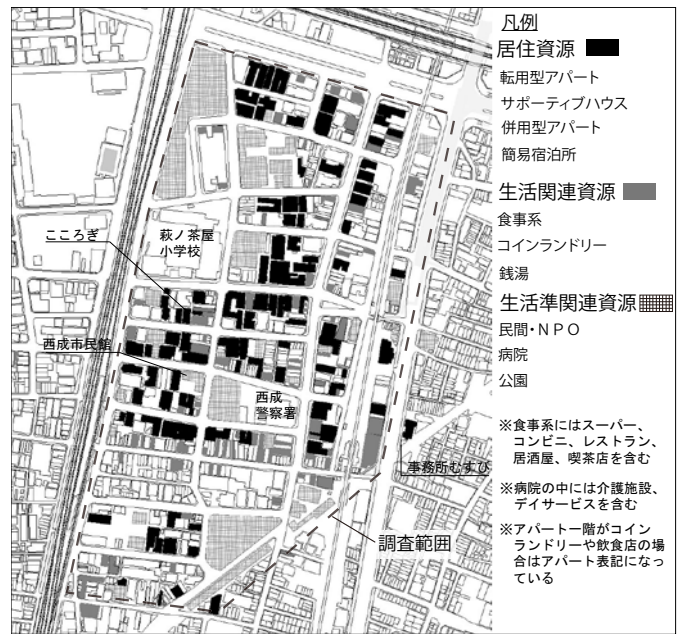


図1 地域資源分布図

表1 調査施設の概要

	西成市民館	こころぎ	ココルーム	事務所むすび
立地特性	SHが集中している中心地	SHが集中している中心地	商店街の中	幹線道路沿い(SHに併設)
会員数	約100人	—	—	2人
利用状況	年間約1000件の相談を承り、利用者の年齢層は50歳以上。カラオケをしに常時来ているのは7、8人。卓球は4、5人が入れ替わりで利用している。不特定多数の相談者に対して、レクリエーションの参加を促している。	定食を提供しており、昼食を食べにくる利用者もいて、喫茶がメインに利用されている。体操教室や年越しそばを振る舞うイベントを通して、利用を始める人が多い。	カフェを中心に、利用者は使い終わった食器などを片付けることを実践している。アート・文化系の地域拠点として定着している。	メンバーの2人以外でも訪れた人は、飲み物を無料で飲める。メンバーは紙芝居のイベントを通して入った経緯があるが少人数のため継続が危ぶまれている。メンバー準備も多くなるが、スタッフと緊張関係を保ちながら関わっている。
業務内容	相談、カラオケなどのレクリエーション、貸館の3つの軸で運営している	喫茶を中心に体操教室や年越しそばを振る舞うイベントを開催している	夜廻りの実施、学生との交流にも取り組み、参加型の活動を中心としている	利用者が主体性をもった場として、メンバー主の写真展や旅行などを行う
運営体制	・常勤2名 非常勤3名 ・運営者 ・運営日 ・運営費	・ココルームのスタッフ ・月、水、金の8時～13時半 ・国の補助金、貸館料	・日によって異なるスタッフ ・特に決まっていない ・国の補助金、カンパ、カフェの売上	・マネージャー1名 ボランティア3名 ・特に決まっていない ・補助金、カンパ、紙芝居の公演料
空間特性	建物は三階建てで二階は保育園と繋がっており、保育園の先生が顔を出すことがある	道路側とアパート内通路側の2つの入り口があり、居住者が通り抜けられる	50cm上がった畳空間があり、ここでイベントなどが行われる	アパートのコインランドリーを改修してできたワンルーム空間であり、水回りは設置されていない
レイアウト図				

**施設の積極利用** ココルームに見られるように、利用者がイベントに積極的に参加するとともに運営にも携わっている。利用者は交流を目的として施設を訪れ、施設での活動が生活の中心となり、高齢者の居場所作りの場として機能している。また、自分を表現することができる場所といった意見も見られることから生活に活力を生み出す場所として利用していると考えられる。

**施設の補完利用** 西成市民館やこころぎに見られるように、サービスを目的に施設へ向かうのではなく、カラオケを楽しむなど、日常生活の不足している部分を補う利用と考えられる。イベントなどには参加するが、積極的に自らイベントに参加するのではなく、イベントがあるから行くといったような受動的な利用となっている。

2-3. 施設の交流促進のための工夫

**利用者への対応** むすびでは頻りに顔を合わす利用者でもできる限り緊張関係を保ちながら接することを心掛けている。自立心を尊重し、利用者自身の生活ペースを崩さないように配慮している。利用者は自分のことは自分でするのが基本であり、そうすることでトラブルの原因となる上下関係を作らずに対等な関係を維持している。

**段階的な対応** 西成市民館では FOR-WITH-BY といった三つの段階を設けており、まずは事業者側が主体的に利用者に働きかけ次に利用者と共に問題解決に取り組み、利用者自らが問題を解決できるレベルに達するとフェイドアウトしていくといったような、利用者と一緒に問題に取り組んでいくといった姿勢をとっている。

2-4. 施設における交流の実態

**“あいま”利用** こころぎでは洗濯が終わるまでの間に喫茶スペースで出会った友達に電話をかけ、一緒にコーヒーを飲むといった行為が見られる。さらに、買い出しから帰ってきた居住者が喫茶スペースにいる若者に話しかけるといった行為や他のアパートに住む知り合いが本を読んでいることに気付き、三人で会話をするという行為も見られる。

**主体性をもった利用** むすびでは人数が揃わずに紙芝居公演の練習ができない時には部屋に戻るといったケースが見られる。また、ヘルパーに風呂を入れてもらう時でも、練習を優先して風呂に入らない場合がある。利用者は受動的ではなく、主体性をもって利用していることが分かる。

**声の掛け合い、差し入れ** むすびでは日常的な声の掛け合いや差し入れが見られた。事務所に顔を出していないメンバーの様子を見に行く行為もみられ、高齢メンバーにカレーを部屋まで届けることもある。

**交流を求めた利用** 食事が目的ではなく、会話のために居酒屋やレストランに行くこともある。「むすびのメンバ

一になってから明るくなりました。」と言い、メンバーとの交流や紙芝居公演に生きがいを感じている。稼いだお金を人との交流のために使うことから、お金よりも交流を大事にしていることが伺える。

3. まとめ

釜ヶ崎の地域施設は利用者が主体性をもちながら他者との交流を促進する工夫を行っている。また利用者は施設を生活の拠点として、孤立しない安定した暮らしを獲得している。釜ヶ崎には生活の拠点となり得る地域資源が多様かつ高密度に存在していることから、そのあり方を見直し、地域資源ネットワークを構築することができれば、単身高齢者の豊かな地域居住が可能になる。

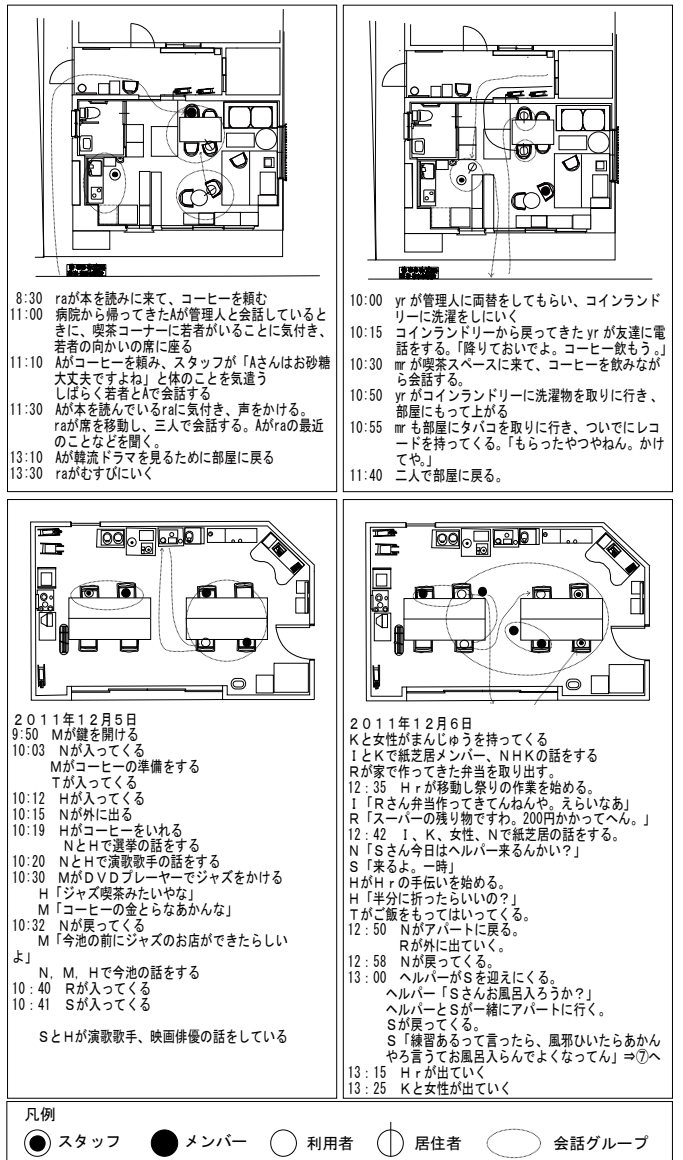


図2 こころぎ・事務所むすびにおける交流実態

\*大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程  
 \*\*大阪市立大学大学院工学研究科 後期博士課程  
 \*\*\*大阪市立大学大学院工学研究科 教授・工博  
 \*\*\*\*大阪市立大学大学院工学研究科 講師・工博

\*Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University.  
 \*\*Doctor Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University.  
 \*\*\*Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr.Eng.  
 \*\*\*\*Lec., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Lec.Eng.